

異色の才人 (住田正一の想い出集より)

帝人株式会社 社長

大屋 晋三



住田正一君と私とは、神戸の鈴木商店に大正七年に一緒に入社しているので、同期生の間柄である。

鈴木商店は、実業界の不世出の偉人金子直吉さんが、第一次世界大戦の風雲に際して、大胆不敵きわまりない積極政策をとって、戦争景気に乗じて大きく発展させたものである。

それまでは神戸の一中貿易商にすぎなかったものが、一躍して三井、三菱と肩を並べて、日本の財界を三分するまでになったのであった。急に膨脹しただけに、天下に人材を求めることが急で、私たちが入社した大正七年などは、鈴木商店始まって以来の多数の学卒者が、ここに入社したのであった。

その集まった多くの人材のなかで、住田君はなんといっても図抜けた異色の存在であった。というのは、われわれ一般の新入社員よりはだいぶ大人びていて、いうことなすことが垢抜けしていた。社に入った当座というものは、誰でも上役の前に出ると、とかくはにかんだり、引込みがちになったりするものだが、その点住田君はおめざ臆せず、先輩に対しても少しも遠慮はせず、場合によればこれをやっつけて憚らぬことさえあった。

いまでもよく憶えているが、彼はある時など、自分が配属されてい

る船舶部の主任荒木忠雄さんを差しおいて、副支配人の永井幸太郎さん(後の日商社長)に対して、まるで食ってかかるような調子で大議論を吹っかけていたことがある。何が理由かは知らぬが、その鼻柱の強いには一驚を喫したものであった。

なお、私が同君から受けた第一印象は、何を聞いても才人ということであった。早くから会社の総師金子さんの知遇を受け、その口述を受けて経済夜話を書いたこともある。また船舶事務を学問的に研究して、船荷証券論や船舶論を雑誌に発表したりするなど、何かにつけてわれわれよりも知恵が一步先立っていた。

その反面、一つの事業なり商売なりにじっくり取組むという、本当の事業家なり商人とはその肌合いが違っていた。果せるかな、彼の後年の経歴は一つの事業に没頭したのではなく、多くの仕事に幅広く関係している。

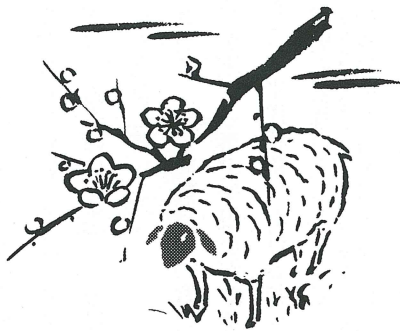
そして、何でも手際よく処理して、何をやらせてもこれを適当にこなすという才人肌を遺憾なく発揮したのであった。

住田君と私との交遊は、私が鈴木から帝人に移り、彼も鈴木破綻後いろいろの仕事をしてきたことから、その間に二十余年もほぼ途絶えていたことがあった。

それが戦後、彼は東京都の副知事になり、私も政界に出たりしたので、また親しくつきあうようになった。ことに同君が辰巳会の世話人を引き受けて、四散しかけていた鈴木商店の関係者を結集するようになってからは、その関係はさらに密接になった。特に播磨造船が石川島重工に合併される数年前から、彼が北村徳太郎、六岡周三、竹田儀一の諸君や私などの間を奔走して、鈴木の旧勢力を糾合して何か実業界に役立たせようと、会合の幹事役をしたり、いろいろ骨折ったりし

てくれたので、腹を割った交際もするようになった。

それやこれやで、住田君と私との交際は、中断はあったとはいっても、五十年の長きにわたっている。単に同期生で、しかも才人として異色な存在であったというだけでなく、良い友人の一人として長く忘れられぬ人物である。



その時 歴史が動いた

巨大商社鈴木商店の栄光と挫折

— 担当ディレクターの取材ノート —

NHK 大阪放送局文化部

藤波 重成

その後の鈴木商店

神戸と聞いて、多くの人がエキゾチックな港町を想像するのではないだろうか。関東生まれの私などは憧れに近い気持ちを抱いている。大正時代、はるか遠く欧州や南洋から来た船員でにぎわう神戸は海外旅行が簡単になった現在よりも数倍、異国情緒あふれる街だったに違いない。その神戸の中心地海岸通りに建つ三階建ての煉瓦づくりのビルが、鈴木商店本店だった。本店前には当時最新の自動車が三台も置かれていたという。

『企業城下町』と言われる街がある。トヨタ自動車のある愛知県豊田市、日立製作所のある茨城県日立市、三菱重工のある少し前の長崎市など、企業と都市が密接に結びついている点が特徴だ。その意味では大正時代の神戸は鈴木商店の城下町と言えなくもない。

インタビューで金子直吉について話をしていた松下さんによると、神戸の繁華街で飲み食いする時、鈴木店の社員と言えども『つけ』にできたそう。企業城下町はメーカーがほとんどだが、それは税金に加えて工場などでその土地に就職口を生み出すからだ。社

員もそんなに多くない鈴木商店がこれだけの扱いを受けていたということは、グループ企業の多さもあつたのだろうが、鈴木は日本一の企業だという神戸人の誇りの現れではなかったかという気がする。

しかし現在、鈴木商店について知る人は神戸に住む人でさえ極めて少ないのが現状である。金子の手紙など貴重な史料を委託されて保管している神戸市立博物館の学芸員の方は、鈴木商店についての展示を行いたい、如何せん史料が乏しいのだと話していた。

大正末期に起きた米騒動による焼き討ち（鈴木商店は米の買い占めをして値を釣り上げているというデマが流れ、事実無根ながら焼き討ちにあった）、昭和二年の倒産、さらに太平洋戦争における神戸の空襲と、相次ぐ不幸が鈴木商店の姿を歴史の表舞台から遠ざけてしまったのだ。その中で鈴木商店についての本格的な研究者と言えば『総合商社の源流鈴木商店』（日経新書）筆者の桂芳男氏をおいて他にない。すでに故人となられているが、神戸大学の教授をされていた氏はこつこつと史料や証言を集め、失われた鈴木商店の三本柱を再構成した。本番組でも氏の著作を頼りに構成されているので、鈴木商店について興味をお持ちの方は是非一読されたい。

また鈴木商店と米騒動に関しては作家、城山三郎氏の『鼠』（この題名は金子の俳号が白鼠であることによる）がバイブルと言つて良い。番組を見ていただいた方の多くから、鈴木商店の沼落劇を現代の様々な企業と重ね合わせて見たという感想をいただいた。とくに銀行の融資が膨れ上がる過程や、大正版不良債権問題とも言える『震災手形救済法案』を巡っては、非常に示唆に富んだ出来事だと感じられるという。しかし、私はそのようなこともさることながら、エピソードで紹介した倒産後の金子氏の姿に注目していただきたいかった。

鑑賞などであるが、服装などはボロで有名だった。もちろん会社の倒産を見越して財産を隠すなどというどこかの企業の経営者のようなことは一切なかった。晩年、各企業に散った鈴木商店の元社員たちが金を出し合い、金子のために一戸建てを買ったが、金子の孫娘にあたる貴答恵子さんは今でもその土地にお住まいだ。

鈴木商店の元社員の同窓会『辰巳会』に倒産後七十年経つても人々が集うのは、金子に代表される鈴木商店の経営気風が今でも、いや今だからこそ輝きを放っているからに相違ない。

「虎は死して皮を残す」と言う。神戸製鋼所、帝人、日商岩井など鈴木傘下でのちに大きく育った企業は数知れない。それも倒産後の金子の働きである。『煙突男』と言われた金子は、景気拡大の波に乗るのは上手くても景気後退に伴う撤退ができなかったと言われるが、じつは鈴木商店最後の幕引きには比類ない手腕を見せたのである。

関東大震災 [大正12年(1923)9月1日]

毎日新聞社提供

関東大震災が発生。政府は震災手形を発行し、多くの企業が銀行から借りた金の利息の支払いを一時的に滞り始めた。やがて不良債権化していき「震災手形」は日本全国で2億円以上となった。



震災手形に関する陳情書提出 [大正15年(1926)8月]

毎日新聞社提供

金子直吉は東京・横浜の財界五巨体に働きかけ、五団体連名で震災手形に関する陳情書を提出。また企業が抱える震災手形を公的資金によって肩代わりしてもらうため、浜口雄幸大蔵大臣に陳情した。



首相の急死で内閣再編 [大正15年(1926)9月]

毎日新聞社提供

加藤高明首相が急死。内閣は再編され、大蔵大臣に片岡謙三が就任。



震災手形善後処理法案提出 [昭和2年(1927)1月26日]

毎日新聞社提供

震災手形善後処理法案が衆議院に提出され国会は賛成。野党は鈴木商店という一企業に恩恵を与えるものではないと非難。両商店が抱える震災手形の金額公表を迫る。



昭和二年恐慌発生の際の鈴木商店の栄光と挫折

金融恐慌にのみこまれた商社

第一次世界大戦勃発から [大正3年(1914)7月28日]

第一次世界大戦が勃発し、長期化。鉄不足を予測した商社 鈴木商店の金子直吉は、鉄の買い占めを行う。大正5年には造船会社の買収に成功するなど鈴木商店の取引網は三井物産を凌駕。



第一次世界大戦終結 [大正7年(1918)11月11日]

第一次世界大戦が終結。鉄鋼、船舶など軍需物資の価格が暴落。鈴木商店は、海軍が進めていた大艦隊建造計画受注をめぐって銀行から資金を借入、大規模な設備投資につぎ込む。



ワシントンで軍縮条約調印 [大正11年(1922)2月6日]

ワシントンでの軍縮条約調印で日本は海軍軍備の制限に同意。大艦隊建造計画は白紙に戻り、巨額の債務が鈴木商店に残る。主な債権先である台湾銀行からは割譲取、下坂彌太郎が、両商店建て直しのために迷ひ込まれる。



何故なら鈴木商店の倒産後の働きこそ金子の真骨頂であると思うからだ。

倒産の決まったあと、金子が第一に考えたのは社員の保護と企業の事業継続である。

鈴木商店の倒産原因は銀行融資が停止したことによる運転資金の不足であり、前出の桂氏によれば鈴木は倒産したが破産した訳ではなかった。実際、鈴木商店は工場、会社を三井などの他社に売ることによって多くの事業を継続させ、さらに六年後には債務を完済している。前出の松下さんの証言によれば、鈴木は社員は退社するものには二年は食えるだろうという相当な退職金を与えられたそうだ。

そのようなことを可能にしたのは、債務の返済をすべて示談にして交渉した金子の手腕である。ちなみに、金子本人は生涯のほとんどを社宅で過ごし、食事も質素なものであった。趣味と言えば俳句、美術

金子は鈴木商店の債務を片づけたのち、再び会社を興して事業の多角化を進めた。人生の中で何度も絶頂とどん底を見た金子の飽くなき事業意欲に対して、批判的でありながらも尊敬の念を抱いていたのが、元日商岩井会長の高畑誠一氏である。高畑は鈴木商店ロンドン支店の支店長として、国際貿易に辣腕を振るった人物だ。高畑は金子のワンマン経営に対して、経営の収支や投資の効率などを真剣に考えてリストラをするよう早くから進言しているが、金子はそのほとんどを無視した。

高畑は鈴木商店の倒産後に貿易部門を独立させて日商を設立、戦後岩井商事と合併して日商岩井となった。経営者としては水と油であった二人だったが、昭和十九年に金子が亡くなった時に最期を看取ったのは高畑であった。企業とは何のためにあるのか、またどうあるべきか、この二人の姿から考えさせられることは多いと思う。

大蔵大臣の失言 [昭和2年(1927)3月14日午後]

毎日新聞社提供

衆議院予算委員会で、政友会・吉植庄一郎議員が震災手形善後処理法案について片岡蔵相を追及。答弁中「東京海運銀行がとうとう破綻」というメモの内容を片岡蔵相が口頭の失言騒動に発展。



金融恐慌へ [昭和2年3月15日]

毎日新聞社提供

金融不安に火がつき、預金者が殺到。預金の取り付けで東京海運銀行は休業。1か月で37の銀行が休業。



鈴木商店倒産 [昭和2年4月2日]

毎日新聞社提供

鈴木商店に多額を融資していた台湾銀行に、預金の取り付けが滞り、やがて休業。4月2日、融資を受けられなくなった鈴木商店が倒産。



内閣総辞職 [昭和2年4月17日]

毎日新聞社提供

金融恐慌の責任をとって内閣が総辞職。

